歴史地震
第 31 号(2016) 53-66 頁
受付日 2015/12/01， 受理日 2016/02/22

［資料］ 岩手県宮古市田老地区に残る 1896 年・1933 年三陸地震の津波に関する碑

栄東高等学校* 安倍 聡志・荒井 賢一・清水 駿平・山本 朗生・髙梨 南風・寺田 達彦

Memorial stones of the 1896 and the 1933 Sanriku Earthquake Tsunamis in Taro District, Miyako City, Iwate Prefecture

Satoshi ABE, Ken'ichi ARAI, Syunpei SHIMIZU, Tokio YAMAMOTO, Minami TAKANASHI and Tatsuhiko TERADA

Sakae Higashi High School, 2-77, Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City, Saitama, 337-0054, Japan

We conducted a field survey of the memorial stones of the 1896 and the 1933 Sanriku Earthquake Tsunamis in Taro District of Miyako City, Iwate Prefecture. Taro district was named Taro Village when these disasters were occurred. We found ten memorial stones in 1896 and nine in 1933. We found another two stones in the Otobe cemetery, but cannot judge which stones are connected with which disasters. We want to pass down the message of these stones to the next generation.
Keywords: Memorial Stone, 1896 Sanriku Earthquake Tsunami, 1933 Sanriku Earthquake Tsunami, Taro Village

§1. はじめに

三陸地方にはこれまで，地震による大津波が繰り返し襲来し，そのたびに甚大な被害を与えてきた．被災者はその経験を後世に伝承しようと，多くの石碑が建てられた．特に，1896（明治 29）年 6 月 15 日と 1933（昭和 8）年 3 月 3 日に発生した地震に関する石碑は，青森県・岩手県・宮城県で多数確認されている．卯花（1991）は，岩手県釜石市の沿岸に建てられている津波に関する石碑の調査をおこない，読み取れた碑文を資料にまとめている．卯花（1992）は，岩手県大船渡市・三陸町（現在の大船渡市）・陸前高田市の沿岸について，同様に碑文を資料にまとめている．

本研究では，岩手県宮古市の田老地区を対象に，前述した 2 つの地震に関する碑を，現地を訪れて調査した．同地区については，著者らが所属する本校理科研究部が，2011(平成 23)年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震による津波の現地調査を同年 11 月に実施し，甚大な被害を目のあたりにした．過去に，この地区全体を壊滅させた上記の地震の教訓（残されているすべての石碑）を本稿に集約して後世に伝えたいという思いから，本研究に着手した．

本研究の対象地域である田老地区は，町村制が施行された 1889（明治 22）年 4 月に田老村に，1944（昭和 19）年 4 月に町制を施行し田老町になった．その後，2005（平成 17）年 6 月に，宮古市に編入された．旧田老町は，2003（平成 15）年 3 月 3 日に「津波防災の町宣言」を発表した．山下（2003）は，高さ 10m・総延長 2.4km 余りの防波堤建設の経緯と，「津波防災の町宣言」が発表されるまでの経緯をまとめている．

*〒337-0054 埼玉県さいたま市見沼区砂町 2-77
電子メール ： rikaken_sh @ yahoo.co.jp

§2. 過去の三陸地震による旧田老村の被害

宇佐美(2011)によると，1933 年三陸地震によって，旧田老村内の田老集落に 10.1m の津波が押し寄せた．田老集落に建っていた 362 戸のうち 358 戸（約 99%）が流出し，全人口 1798 名のうち 763 名（約 42%）が亡くなった．旧田老村全体でも，559 戸のうち 500 戸（約 89%）が流出し，全人口 2773 名のうち 901 名（約 32%）が亡くなった．

同じく宇佐美（2011）によると，1896 年三陸地震によって，当時の田老集落には 14.6m の津波が押し寄せた．旧田老村全体で，666 戸の建物のうち 230 戸（約 35%）が流出し，全人口 3747 名のうち 1400 名（約 37%）が亡くなった．

羽鳥（1977）によると，さらに時代をさかのぼった 1611（慶長 16）年に発生した地震では，当時の田老集落には高さ 15～20m の津波が押し寄せた．この津波によっても，集落がほぼ全壊している．

§3. 田老地区に残る石碑の調査結果

現地調査は，2015（平成 27）年 11 月 22 日及び 2016（平成 28）年 1 月 31 日に行った．宮古市（2014）と国土交通省東北地方整備局（2014）に記載されている石碑を中心に，文献を参照しながら現地で石碑の碑文を読み取り，加筆・修正を行った．

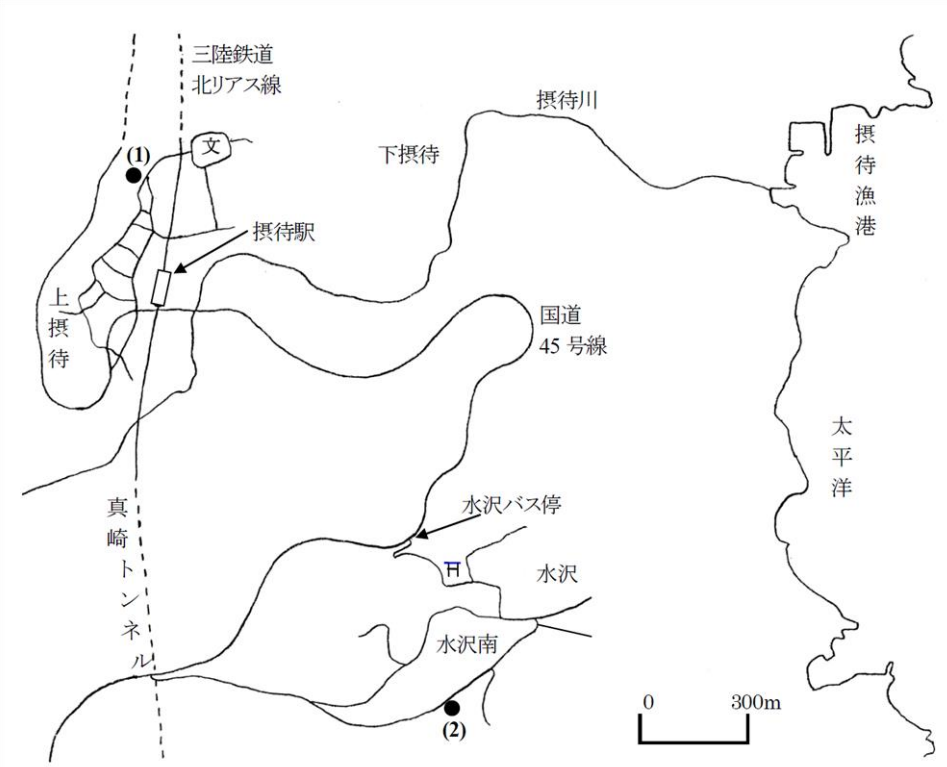

図 1-1　摂待地区の地図

Fig.1-1 The map of Settai area.

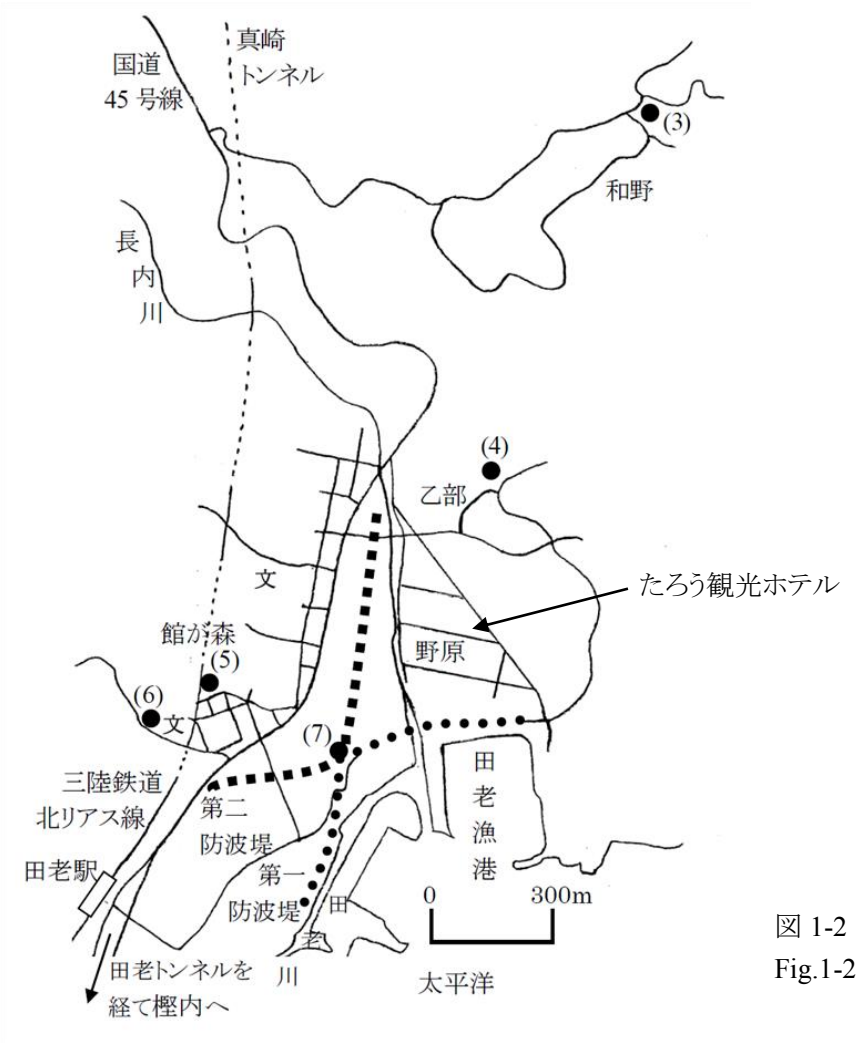

図 1-2　田老駅周辺の地図

Fig.1-2 The map around the Taro station.

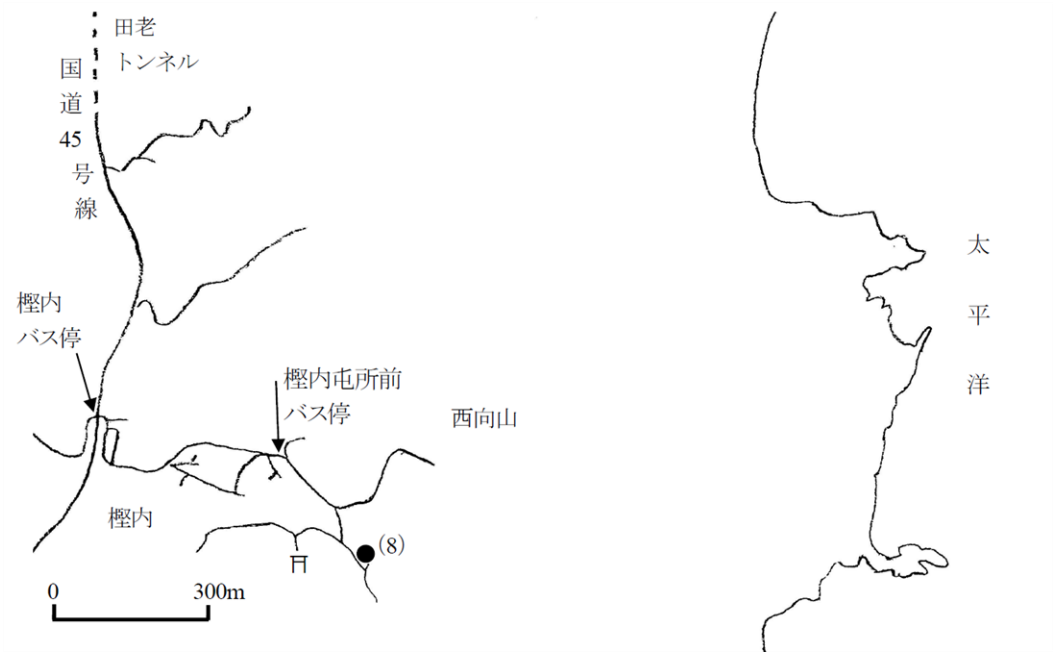

図 1-3　樫内地区の地図

Fig.1-3 The map of Kashinai area.

表 1　本稿の調査地一覧

Table.1 The list of spots we surveyed.

図の番号	所在地	記号	碑銘	対象地震	津波碑	一覧シート
図1-1	(1)上摂待	石碑A	三陸海嘯拾三囲忌	1896年	番号②	番号035
		石碑B	海嘯死者供養	1896年	番号①	番号034
	(2)水沢墓地	石碑C		1933年	／	番号036
図1-2	(3)清水端公葬地	石碑D	海嘯横死者之碑	1896年	番号③	番号037
		石碑E	海嘯死者菩提塔	1896年	番号④	番号038
	(4)乙部墓地	石碑F	海嘯死者之碑	1933年	／	／
		石碑G	海嘯死者之･･･	不明	／	／
		石碑H	海嘯死者　腹子氏之碑	不明	／	／
	(5)常運寺	石碑I	海嘯之碑	1896年	番号⑦	番号040
		石碑J	海嘯死者之碑	1896年	／	／
		石碑K	海嘯死者碑	1896年	番号⑥	番号043
		石碑L	曹洞宗　常運寺	1933年	／	番号044
		石碑M	海嘯供養塔	1933年	番号⑨	番号041
		石碑N	弔　海嘯死者碑	1933年	番号⑩	番号039
		石碑O	三陸大海嘯溺死者慰霊塔	1933年	番号⑧	番号042
	(6)田老第一小学校	石碑P	大海嘯記念	1933年	番号⑪	番号045
	(7)田老海岸堤防	石碑Q	田老海岸堤防	1933年	番号⑫	／
		石碑R		1933年	番号⑬	／
図1-3	(8)樫内公葬地	石碑S	南無阿弥陀佛	1896年	番号⑮	番号047
		石碑T	大海嘯記念碑	1896年	番号⑭	番号046
		石碑U	南無阿弥陀佛	1896年	番号⑯	／

調査地点は，表 1 の通りである．なお，表 1 中の「津波碑」の項には，宮古市（2014）に記されている番号を，「一覧シート」の項には，国土交通省東北地方整備局（2014）に記されている番号をそれぞれ表記している．斜線は，その文献に掲載されていなかった事を指す．調査地の位置関係は，図1にまとめる．

本稿では，碑文をそのまま書くことを心掛けたが，紙面の都合上，縦書きのものも横書きにし，改行される箇所に「／」を挿入する．また，人名は本文中に表記してあるもの以外は省略し，括弧を付けて人数を記述するが，役職の後に人名が1人しか書かれていなかった場合は，括弧書きでの説明を省略する．本文中に当時の被害や復興の状況が文面で記述してあったものは，碑文全体の解読文を載せている．

さらに，風化している文字や書体が読み取れなかった文字は○で表現し，旧字体でワープロ書きができなかったものは新字体で表記する．石碑には記述をする順に，アルファベット（大文字）の記号を付している． この記号は，地点ごとに1896年三陸地震の津波に関する石碑，1933 年三陸地震の津波に関する石碑の順になっている．同じ地震に関する石碑が複数ある場合は，より入口に近いものを先に記述している．

(1) 上摂待

図 1-1 の（1）の位置は，上摂待の集落から山林への入口付近である．ここには，合計 12 基の石碑が並んでおり，右端から 2 番目と 3 番目のものが，それぞれ石碑 A, B である．共に，1896 年三陸地震の津波に関する石碑であり，以下の碑文が書かれていた．

【石碑 A】

（正面上部）三陸海嘯拾三囲忌

（正面下部）宮城縣戸數千百八拾四戸／死亡者三千三百拾四人／岩手縣戸數六千百八拾六戸／死亡者弐萬五千四百拾三人／青森縣戸數四百八拾四戸／死亡者三百四拾六人／下摂待戸數拾戸死亡者五拾六人／牛死亡拾九頭

（台座正面）為頓証菩提／施主　畠山長之助／天保十四年九月拾九日生／宮古町新町　（1 人）／摂待世話人　（計 5 人）／下摂待世話人　（計 5 人）／水沢（計 2 人）／下摂待　（1 人）

（右側面）明治二十九年旧五月五日／明治四十一年三月

この石碑は，1896 年三陸地震の津波で亡くなった方が 13 回忌を迎えた際に建てられたもので，地震が起こった時の被害が箇条書きで書かれていた．

図 2 上摂待に建つ石碑 A

Fig.2 The memorial stone "A" built in Kami-Settai.

【石碑 B】

（正面）明治廿九年六月十五日歿／海嘯死者供養／仝年八月十四日　畠山長之助建立／○　海嘯死者供養／上摂待　女　壱名　／下摂待　男廿五名／女廿五名／水沢　壱名／小堀内女壱名／日蔭　男壱名

この石碑は，1896 年三陸地震の津波によって亡くなった方を供養するため，同年 8 月に建てられた．

図 3 石碑 A の隣に建つ石碑 B

Fig.3 The memorial stone "B" built next to the memorial stone "A".

(2)水沢墓地

水沢墓地へは，図 1-1 に記したように，三陸鉄道北リアス線の接待駅から岩手県北バスに乗車し，「水沢」バス停で下車する．バス停からは国道 45 号線から離れるが，舗装された道路が続く．墓地は，海抜 150m の高所に位置する．案内板等の表示は無いが，1 カ所の敷地に墓石群が並んでいる．墓地の入口（道路から敷地に入ってすぐ）に，5 基の墓石が並んでいる．そのうちの左端から 2 基目（石碑 C）には，以下のような碑文が記されていた．

【石碑 C】

（正面）生地／宮城縣宮城郡七北村松森／昭和八年旧二月八日／海雲功樹信士／津浪遭難　安田要助／行年五十八才／森山千代松建之

この石碑は，宮城県出身者の個人の墓として建てられた．1933 年三陸地震の津波によって，この地で犠牲になった．

図 4　水沢墓地に建てられている石碑 C

Fig.4 The memorial stone “C” in the Mizusawa cemetery.

碑文から 1933 年三陸地震の津波に関する碑と判断できる．

5 基のうち右端と右端から数えて 2 基目には，それぞれ正面に，「昭和八年三月三日」と「明治二十九年旧五月五日」と，三陸地震が発生した日付が記されていた．右端の碑は，日付の他に人名と年齢，および「天理教宮古宣教所健之」という文字が明確に読み取れるが，地震に関する文字は記されていない．また，右端から 2 基目は，草書体で記されていたが，摩耗が進んでおり，日付以外の文字の判別は困難である．よって，これらの 2 基は，三陸地震に関する碑であると断定できる材料が不足しており，アルファベットの記号を付さない．

(3) 清水端公葬地

清水端公葬地へは，三陸鉄道北リアス線の田老駅から国道45号線を北上していく.蛇行しながら登っていくと真崎海岸と書かれた標識がある.その丁字路を右折し山道を進んでいく.清水端公葬地は舗装されていない路地を入った奥にある.

石碑Dは墓地の入り口右側にある．石碑Eは墓地内にある通路のうち，入口から3段目の通路を右に入り突き当たり正面にある．2基の石碑D, Eにはそれぞれ以下のような碑文が記されていた．

【石碑 D】

（正面）海嘯横死者之碑

明治廿九年陰暦五月五日午後八時三陸大／海嘯起ル当村モ其災害ニテ千九百余人ノ／死者ヲ至シ四百余ノ家屋ヲ流出シ其死者／之内姓名不詳ノ者ヲ埋葬シテ精霊ヲ祭ル

（台座）

越田／（計 2 人の名が記されていた．）／松長根／（計 12 人の名が記されていた．）

正面の碑文は次のように解読できる．

明治 29 年陰暦 5 月 5 日午後 8 時三陸大津波がおこる．この村もその災害によって 1900 人余りの死者を出し，400 余りもの家屋が流出し，その死者のうち名前のわからない者を埋葬して精霊を祀る．

図 5　清水端公葬地にある石碑 D

Fig.5 The memorial stone “D” in the Shizubata cemetery.

【石碑 E】

（正面上部）海嘯死者菩提塔

（正面下部）明治二十九年旧五月五日／（2 段にわたって，計 8 人の名が記されていた．）／外　四名／施主加藤六郎建立

この石碑は，1896 年三陸地震の津波によって亡くなった方を追悼するために建てられた．

図 6　清水端公葬地にある石碑 E

Fig.6 The memorial stone “E” in the Shizubata cemetery.

碑文から，どちらも 1896 年三陸地震の津波に関する石碑と判断できる．

(4) 乙部墓地

乙部墓地は，たろう観光ホテルの北にある階段を上がり，その先にある山道を左に進んだ突き当たりにある．石碑 F は，墓地の最上段に，石碑 G は上から 3 段目に，石碑 H は 4 段目に建てられていた．

【石碑 F】

（正面）海嘯死者之碑

（左側面）昭和八年旧二月八日

（右側面）（人名が計 5 人分記されていた．）

この石碑は，1933 年三陸地震の津波によって亡くなった家族を追悼するために建てられたものである．碑文に「昭和八年旧二月八日」や「海嘯」と明記してあるため，1933 年三陸地震の津波に関係しているものであると判断した．

図 7　乙部墓地にある石碑 F

Fig.7 The memorial stone "F" in the Otobe cemetery.

【石碑 G】

（正面）海嘯死者之…

この続きは，石碑自体が土に埋まっていたため，読み取ることができなかった．

図 8　乙部墓地にある石碑 G
Fig.8 The memorial stone "G" in the Otobe cemetery.

【石碑 H】
(正面上部)海嘯死者
(正面下部)腹子氏之碑

図 9　乙部墓地にある石碑 H
Fig.9 The memorial stone "H" in the Otobe cemetery.

石碑GとHは，いずれも津波で亡くなった方の慰霊碑であることは確認できたものの，日付は記されていない．これらの石碑に関しては，宮古市(2014)や国土交通省東北地方整備局(2014)にも記載されていないため，本研究ではどの地震に関係しているかは判断できなかった．

(5)常運寺
常運寺は，宮古市田老事務所(旧田老町庁)のすぐ左隣にある．ここには，本稿の対象地震に関する碑が 7 基建てられていた(記号 I～O)．

各石碑は図 10 のように配置されていた．石碑I, J, M, Nは，寺院の入口の近くに集まって建っており，石碑 I は石碑 M に向かって右隣に，石碑 N は石碑 M のすぐ後方に位置している．石碑 K と O は，前述の 5 基が面する通路を少し進んだところに建てられている．石碑 K は正面が本堂の方を向いており，石碑 O は正面が寺院の入口の方を向いている．

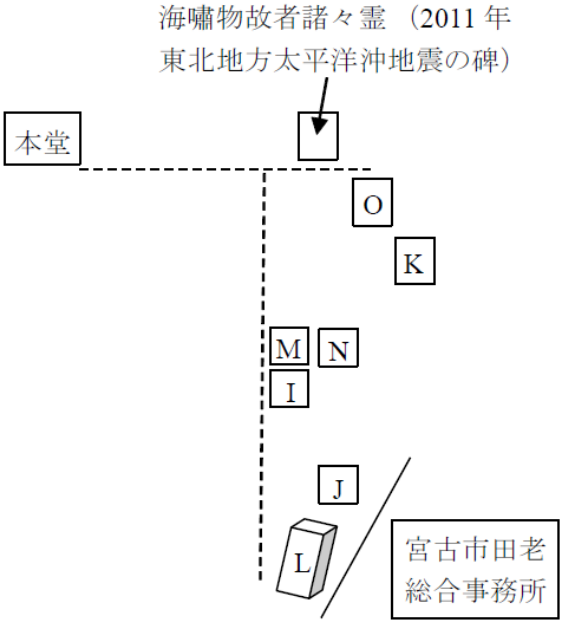

図 10　常運寺の石碑 I～O の配置
Fig.10 Location of the memorial stones "I" to "O" in the Jyouunji temple.

【石碑 I】
(正面上部)明治廿九年／海嘯之碑
(正面下部)六月十五日／(人名が計 7 人分記されていた．)／旧五月五日

この石碑は，1896 年三陸地震の津波で亡くなった方を追悼するために建てられた．

図 11　常運寺にある石碑 I
Fig.11 The memorial stone "I" in the Jyouunji temple.

【石碑 J】
（正面）明治二十九年／海嘯死者之碑／旧五月五日
（その下に人名が計 5 人分記されていた．）

この石碑は，1896 年三陸地震の津波で亡くなった方を追悼するために建てられた．

図 12　常運寺にある石碑 J
Fig.12 The memorial stone "J" in the Jyouunji temple.

【石碑 K】
（正面）海嘯死者碑
（右側面）三陸海嘯害當地取極惨于時／明治二十九年六月十五日

右側面の碑文は，「三陸津波はこの地にその当時では見たことが無い極めてひどい災害をもたらした」と解読できる．

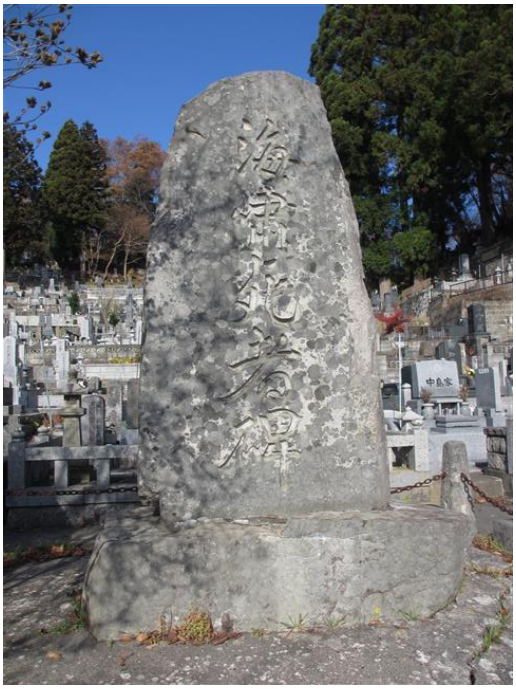

図 13　常運寺にある石碑 K
Fig.13 The memorial stone "K" in the Jyouunji temple.

【石碑 L】
（正面）曹洞宗　常運寺
（裏面）昭和五十七年建立／昭和八年海嘯五十回忌記念／寄進者　小池石材店

石碑Lは寺院の入口に建てられた石柱で，裏面に 1933 年三陸地震による津波に関することを示す碑文が記されていた．

図 14　常運寺に建てられている石碑 L
Fig.14 The memorial stones "L" in the Jyouunji temple.

【石碑 M】
（正面上部）海嘯供養塔
（正面下部）海嘯遭難者／（その左隣に人名が計 9

人分記されていた.）
（台座正面）大謀山﨑十九／造外八氏は宮／吉町坂本嘉兵／エ経営の磐城／國四倉漁場大／謀網に従事し／累年功績顕著／なるとのあり／図らざりき昭／和八年三月拂／暁突如三陸地／方大津浪襲来／し等しく避難／の途を絶たれ／挙げて不測の／厄を蒙る其死／や惜むべく我／等英霊を慰む／るに術なし依／りて四倉浜漁／業組合外生前／知友相謀り茲／に慰霊供養塔／を建立す
（裏面）建設発起人／（人名が計 2 人分記されていた.）／石工 1 人

台座正面の碑文は，次のように解読できる.

山﨑十九造とその他 8 人は，宮吉町の坂本嘉兵エが経営している磐城國四倉漁場の大謀網漁船で働いており，毎年その功績は他に比べて際立ってよかったという.
昭和 8 年 3 月の明け方，予測できなかったが，突如三陸地方に大津波が襲来し，皆同じように避難経路を絶たれ，不測の厄が全員に降りかかった．我々はその死を惜しむしかなく，英霊を慰めるしか方法が無かった．そのため，四倉浜漁業組合の他，生前の知友が協力しそれぞれ相談して，ここに慰霊供養塔を建立する.

図 15 常運寺にある石碑 M
Fig.15 The memorial stone "M" in the Jyouunji temple.

【石碑 N】
（正面上部）弔 海嘯死者碑
（正面下部）昭和八年／（人名が計 4 人分記されていた.）／三月三日
（台座正面）同級生／（人名が計 13 人分記されていた.）

この石碑は，1933 年三陸地震の津波によって亡くなった方を追悼するため，その同級生が建てたものである.

図 16 常運寺にある石碑 N
Fig.16 The memorial stone "N" in the Jyouunji temple.

【石碑 O】
（正面）昭和八年三月三日（旧二月八日）午前三時十分海嘯襲来／三陸大海嘯溺死者慰霊塔／田老村流出戸数五百五戸溺死者九百十一名／石巻市 石井〇(敬と思われる)三郎刻
（裏面） 本慰霊塔ハ東京朝日新聞社讀者ヨリ寄託／セラレクル義捐金ヲ同社ニ於テ罹災各町／村ニ分配セル残金ヲ更ニ震災記念碑建設費トシテ岩手縣ヲ経テ寄贈セラレタル金／員ヲ以テ建設セルモノ也／昭和九年三月／下閉伊田老村長 関口松太郎 誌

裏面の碑文は，次のように解読できる.

この慰霊塔は，東京朝日新聞の読者により寄託された義捐金を，罹災した各町村に同社が分配した後で残ったお金と，震災記念碑建設費として岩手県を通して寄贈された金員によって建設されたものである.
この石碑は，1933 年三陸地震の津波で溺死した方を追悼するために建てられた慰霊塔である.

図 17　常運寺にある石碑 O
Fig.17 The memorial stone "O" in the Jyouunji temple.

碑文の内容から，石碑 I～K は 1896 年三陸地震，石碑 L～O は 1933 年三陸地震による津波に関するものであるとわかる．

(6)宮古市立田老第一小学校

田老第一小学校は，国道 45 号線から伸びる坂を上がったところにある．石碑 P は体育館裏の路上に建っていた．

【石碑 P】
(正面上部)大海嘯記念
(正面下部)一　大地震の後には津浪が来る／一　地震があったら此処へ来て一時間我慢せ／一　津浪に襲れたら何処でも此の位の高所へ逃けろ／一　遠くへ逃けては津浪に追付かる／一　常に近くの高い所を用意して置け／石巻市　石井敬三郎
(裏面)昭和八年三月三日午前二時三十分上下に動揺ス／ル強震アリ續イテ三時十分頃ヨリ大音響ト共ニ大／海嘯ノ襲来アリ午前三時二十分頃被害最モ多シ／本村ノ流失戸数五百五戸溺死者九百十一名負傷／者百二十二名／損害見積額金二百九十二万八千七百五十五圓／本碑ハ東京朝日新聞社讀者ヨリ寄託セラレタル／義捐金ヲ同社ニ於テ罹災各町村ニ分配セル残餘／ヲ更ニ本碑建設費トシテ寄贈セラレタル金員ヲ／以テ建設シタルモノ也／昭和九年三月／下閉伊郡田老村長　關口松太郎　誌

裏面の碑文は次のように解読できる．

昭和 8 年 3 月 3 日午前 2 時 30 分，上下に強い揺れがあり，続けて 3 時 10 分頃より大きな音とともに大津波が襲来，午前 3 時 20 分頃に最大波が押し寄せた．この村の流出戸数は 505 戸，溺死者 911 名，負傷者 122 名，損害見積もり額は 2928755 円に及んだ．

この碑は，東京朝日新聞の読者により寄託された義援金を，罹災した各町村に同社が分配し残ったお金と，震災記念碑建設費として岩手県を通して寄贈された金員によって建設されたものである．

地震が発生してから津波が到達するまでの時間や津波の高さは，震源の位置や地震の規模によって左右される．1896 年三陸地震では，多くの地域が震度 3 以下など震度は小さかったものの，大津波が発生した．正面に記されている 1～3 番目の教訓は，あくまでも 1933 年三陸地震の津波を踏まえてのものである．

図 18　田老第一小学校の横の道路に建つ石碑 P
Fig.18 The memorial stone ”P” built in the street next to the Taro-Daiichi Elementary school.

(7) 田老海岸堤防

この地点は，第一防波堤と第二防波堤が交差する部分に位置する．2011 年東北地方太平洋沖地震の津波の被害を受け，第一防波堤は土台だけを残して流出している箇所が多かった．石碑 Q と R は，復興工事中の区域内にあったため，岩手県宮古市都市整備部都市計画課　復興まちづくり推進室より許可を頂き，読み取ることができた．

【石碑 Q】

(碑文)田老海岸堤防

図 19　田老海岸堤防にある石碑 Q

Fig.19　The memorial stone “Q” in the bank at the Taro seaside.

図 19 に写っている石碑 Q が刻まれている碑板のすぐ上が防波堤の上部である．この図は内陸側から撮影した写真で，反対側（調査の時点では，写真でも確認できるように，反対側に出る部分は閉じられていた．）の同じ高さのところにも，同様の 6 文字の碑文が刻まれている．

図 20 の写真に写っている石碑 R は，図 19 の写真より左下部に埋め込まれている．宮古市（2014）に掲載されている碑文の漢字は新字体であるが，現地で碑文を読み取ったところ，旧字体で記されていた．また，現地で碑文を読み取ったところ，金額や日付の部分が空欄となっている箇所があった．それらの部分は，碑文や解読文の記述の中でも空欄のままとする．

【石碑 R】

(碑文)沿革／世ニ所謂天災地變ナルモノ多シト雖モ蓋シ震嘯災害ヨリ甚シキモノ莫カルヘ／シ顧フニ本村ハ其ノ災害ヲ被ムリタルコト慶長十六年十月二十八日延寳五年／三月十二日寳暦元年五月二日寛政五年一月七日安政三年七月二十三日明治二／十九年六月十五日昭和八年三月三日ノ七回ニシテ就中被害最モ悽惨ヲ極メタ／ルモノヲ慶長明治昭和ノ三回トス試ニ昭和八年被害ノ概況ヲ擧クレハ流失倒／潰戸数五百五戸死者九百十一人貨貳ノ損害實ニ三百数十萬圓ノ巨額ニ達セリ／而モ斯ノ變災ニ於テ萬死ニ一生ヲ得タルモノト雖モ全ク衣食住ノ途ヲ失ヒ其／ノ惨狀言語ニ絶シタルモノアリキ此ノ報一タヒ　天聽ニ達スルヤ／天皇皇后　両陛下ニ於セラレテハ深ク御軫念遊ハサレ特ニ憂渥ナル御沙汰ヲ賜ヒ侍／從ヲ遣ハサレテ親シク遺族ヲ慰メ御内帑ヲ開キ給ヒテ救恤ノ資ヲ御下賜アラ／セラル／聖慮　鴻大／天恩　無窮／誠ニ恐懼感激ニ勝ヘサル所ナリ又各宮家ヨリハ夫々御救恤ノ資ヲ賜ハリ聖世／ノ　皇恩彌ヤ崇キヲ仰キ奉ルト共ニ國縣ノ厚キ援助指導ト義ニ富ム江湖ノ／同情等ニ頼リテ生活ノ不安ハ漸次薄キタルモ専問學者ノ調査研究ニ依レハ我／カ三陸沿岸ハ由來地震帯ニシテ時ニ海嘯災害ハ到底免レサルヘシト宜ナル哉／村民ハ既往ニ於ケル週期的悲惨ノ災害ニ稽ヘ極度ニ恐怖ノ念ニ驅ラレ地震起／ル毎ニ狼狽狂奔堵ニ安ンセサル傾向ナリシヲ以テ村ハ防浪設備ノ必要ヲ痛感／シ海岸堤防ノ築造ヲ計画シ昭和九年度ニ於テ起工シ初年度ハ村カ獨力ニテ經／營セシモ災餘ノ財政耐ユル所ニアラサルニ依リ次年度ヨリハ縣カ國費ノ補助／ヲ得テ直營シ昭和　年度ヲ以テ竣成ヲ告ケ茲ニ本村復興ニ關スル唯一ノ基／礎實現スルヲ得タリ／該工事ノ概要ヲ擧クレハ左ノ如シ／堤防延長一，二二〇米高サ潮汐面上一〇，六〇米　天幅三米　根幅二五米／前面混凝土壁階段法覆上部及背面ハ石張法覆トス第二通路工上手ハ石張堤／防トシ海岸トノ連絡ニ通路工二ヶ所ヲ設ケ幹線街路トノ連絡ヲ計リ斜接扉／ヲ設置シ津浪時ニ於テハ波壓力ニ依ル自動遮閉ニ備ヘタリ又各街路支線ト／海岸トノ歩道連絡ニハ小階段ヲ以テセリ／此ノ全工費金　圓ヲ要シタリ／災害勃發直後御來村親シク實況御視察ノ上救濟救護ニ多大ノ御援助御指導ヲ／賜ハリタル高位高官ハ左ノ如シ／侍從　／岩手縣知事　／農林大臣　／内務省社會局長官　／陸軍大臣代理陸軍少将　／海軍大臣代理海軍大佐　／理學博士　／林學博士　／以上ノ經過ト村民一致ノ奮励トニ依リ復興事業ハ着々トシテ進行ノ途上ニア／ルノ秋　畏クモ秩父宮雍仁親王殿下ニハ弘前歩兵第三十一聯隊第三大隊長／トシテ御在任中昭和十一年十月二十六日縣下御視察ノ砌リ　妃殿下御同列／ニテ特ニ本村ニ御成遊サレ地方物産ノ臺覽災害復興ノ狀況等ヲ親シク御視察／ノ上種々難有御言葉ヲ賜ハル聖世ノ惠澤洵ニ恐懼感激ニ勝ヘス斯ノ如キ／ハ本村空前ノ光榮ニシテ村民タルモノ深ク之ヲ牢記シ業務ニ精進以テ聖慮ニ／對ヘ奉ラサル可カラス／今

ヤ本村守護ノ使命ニ任スル海岸堤防工事成ルニ逮シテ其ノ由ヲ石ニ勒シ以／テ之ヲ後昆ニ傳フト云爾／昭和　年　月　日／田老村長　關口松太郎誌／尚本工事ニ直接監督指導ノ任ニ當ラレタル諸氏ハ左ノ如シ／岩手縣土木課長　　地方技師　　／岩手縣土木技師　兼　道路技師　　／岩手縣土木技師／岩手縣土木課長　地方技師　　／宮古土木管區主幹　岩手縣技手　／同　　同　　／岩手縣道路技手　／盛岡市花屋町石工高橋仁助刻

この碑文は次のように解読できる.

世間では天変地異が多いと言われているけれども，おそらく地震よりひどい災害はないだろう. 振り返ってみると，この村が地震の被害を受けたことは，慶長 16 年 10 月 28 日，延寳 5 年 3 月 12 日，寳暦元年 5 月 2 日，寛政 5 年 1 月 7 日，安政 3 年 7 月 23 日，明治 29 年 6 月 15 日，昭和 8 年 3 月 3 日の 7 回あり，特に被害が凄惨を極めたものは，慶長，明治，昭和の 3 回であった. 昭和 8 年の被害の概況を挙げてみると，流出倒潰戸数 505 戸，死者 911 人，財貨の被害は実に三百数十万円もの巨額に達した. しかも，この災害において万死に一生を得た者であっても，完全に衣食住の術を失い，その惨状は言葉にできないほどであった.

この被害状況の一報が夕方，天皇の耳に入ると，天皇・皇后両陛下におかれては，深く御心を痛めなさって，とても慈悲深いご処置をなさり，侍従をお遣りなさって，親しく遺族を慰め，皇室の財貨の倉庫をお開きになって，被災者の救いの資財をお恵み下さった. 天子の心は大変大きく，天からの恵みは無限であり，たいそう恐れかしこまって，感激に耐えることができない. また各宮家からは，それぞれ被災者への救いの資財をいただいた.

いよいよ畏れ多き今上天皇の恩を尊敬し申し上げるとともに，国・県の熱い援助，指導や思いやりに富む世間の同情などに頼って生活の不安はだんだん薄れているが，専門の学者による調査や研究によれば，「われわれの住む三陸沿岸は元来地震帯であって，時として津波の災害は到底免れることができないことは当然である. 」と知らせている.

村民は過去に起こった周期的で悲惨な災害を考えて，極度に恐怖の念に駆られ，地震が起こるたびに思わず慌てふためき，狂ったように走り回り，安心して生活できない傾向にあったので，村は防波設備の必要性を痛感し，海岸堤防の築造を計画し昭和 9 年度に起工し，初年度は村が独力で経営するも，災害の後の財政は耐えることができなかったので，次年度からは県が国費の援助を得て直営し，昭和　年度を以って竣成を告げ，ここに本村復興に関する唯一の基礎実現をすることができた. この工事の概要を挙げると，次の通りである.

堤防の長さ 1220m，潮汐を受ける面は 10.60m，上の幅 3m，根元の幅 25m，前面はコンクリート壁階段方式で覆い，上部及び背面は石張り法で覆う. 第 2 通路上手は石張り堤防とし，海岸との連絡工 2 か所を設け，幹線道路との連絡を図り，斜接扉を設置し，津波時においては波圧力における自動遮閉に備えた. また，各街路支線と海岸との歩道道路には小階段を用いた. この全工費は（この部分は空欄）円を要した.

災害が起きた直後，直接村に現状を見にいらして，救済・救護に多大のご援助，ご指導を下さった高位高官は左の方々である.（人名は省略する. ）

以上の経過と村民一致の努力により，復興事業が着々と進行途上にあった秋，畏れ多くも秩父宮雍仁親王殿下は，弘前歩兵第 31 聯隊第 3 大隊長として在任中でいらした昭和 11 年 10 月 26 日に県内の諸地域を御視察なさった時に，妃殿下もご一緒なさり，特にこの村にいらっしゃって地方物産をご覧になり，災害復興の状況を自ら御視察の上，あれこれ多くのありがたい言葉をいただく. 高貴な方から受けた恩はたいへん畏れ多く，このようなことはこの村に今までなかった光栄であり，村民であるもの，深く心に留め，業務に精進することで天子の御志に応え申し上げなければならない. 今やこの村を守護するという使命を任せる海岸堤防工事を行うに及んで，その経緯を石に刻んでこれを子孫に伝えたい.

図 20　田老海岸堤防にある石碑 R
Fig.20 The memorial stone “R” in the bank at the Taro seaside.

(8)樫内公葬地

樫内公葬地へは，三陸鉄道北リアス線の田老駅から岩手県北バスに乗車し，「樫内屯所前」バス停で下車する．ここから，南西方向に道なりに進むと大きな石碑のある三叉路に着く．そこを右折して，突き当りにあるわき道に入ると石造物が見える．

公葬地入口には 8 つの石造物が横一列で並んでおり，向かって左から 2 つ目が石碑S，4 つ目が石碑Tである．石碑Uは公葬地内の一番奥に建てられている．いずれも1896年三陸地震の津波に関係しており，それぞれ以下のような碑文が記されている．

【石碑 S】
(正面)ナツ　トク　エイ　フカ／南無阿弥陀佛／明治廿九年五月五日／為海嘯流死菩提
(裏面)畠山与市印／建之

この石碑は，1896 年三陸地震の津波によって亡くなった方を追悼するために建てられた．

図 21　樫内公葬地にある石碑 S
Fig.21 The memorial stone “S” in the Kashinai cemetery.

【石碑 T】
(正面)明治廿九年旧五月五日／大海嘯記念碑／当村中

この石碑は，1896 年に三陸地震の津波が起きたということが記されたものである．

図 22　樫内公葬地にある石碑 T
Fig.22 The memorial stone “T” in the Kashinai cemetery.

【石碑 U】

(正面上段)南無阿弥陀佛／爲海嘯流死菩提／明治廿九年／五月五日

(正面下段)カシ内／小林福松／建之

この石碑は，1896 年三陸地震の津波によって亡くなった方を追悼するために建てられた．

図 23　樫内公葬地にある石碑 U
Fig.23　The memorial stone "U" in the Kashinai cemetery.

§4.　おわりに

本調査では，計 21 基の石碑を確認することが出来た．そのうちの 10 基は 1896 年三陸地震，9 基は 1933 年三陸地震に関するもの，残りの 2 基はどの時代の地震に関するか判断がつかなかった．

1933 年三陸地震に関する石碑 P には，地震の発生から津波の到達までの様子，被害の状況から復興支援に関することまで，当時の様子をイメージできるほど詳細に記されていた．一方で 1896 年三陸地震に関する碑は，この地震による揺れが小さかった(多くの地域で震度 3 以下であった)ためか，いずれも海嘯(津波)が発生したことのみが記されていた．

石碑 R のように，1933 年三陸地震による被害と復興の過程が詳細に記されている上，この地震以前に 7 回の大津波が襲来した日付を明示した碑文も，1 人でも多くの人に読んで頂きたい貴重な資料である．石碑の碑文は，年月が経つと風化して読み取れなくなってしまうことがある．防災を考える中で，このような石碑を読み取り，書面化することで，後世に残していくことも重要ではないかと思う．

謝辞

石碑の現地調査に先立ち，宮古市教育委員会からは，宮古市(2014)を提供して頂きました．国土交通省東北地方整備局広報課の方々には，水沢墓地の詳細な位置について教えて頂きました．岩手県宮古市都市整備部都市計画課　復興まちづくり推進室には，田老海岸堤防での調査の許可を頂きました．現地調査の旅費は，公益財団法人武田科学振興財団より採択された高等学校理科教育振興奨励の助成金を使用させて頂きました．本論文の担当編集委員の林豊氏，および査読者の塩川太郎氏と匿名の査読者の方には，本稿に対して丁寧なコメントを頂き，改訂するにあたり有意義でありました．栄東中学校の藤井聡氏と栄東高等学校の宮崎雅芳氏には，碑文を解読するにあたって，ご指導をいただきました．また，以下の部員にも碑文の解読や本稿の校正を行って頂きました．記して感謝致します．

栄東高等学校理科研究部部員：高木駿・小林優介・久家健太郎・岡田絵里香・山浦照良・内保創太・北廣創史・富永浩司・今井旅生・斎木悠亮・尾﨑諒・金山潤・宮﨑智貴・湯沢柊哉・沼垣柊

対象地震：1896 年明治三陸地震，1933 年昭和三陸地震

文 献

羽鳥徳太郎，1977，歴史津波，いるかぶっくす．

宮古市，2014，東日本大震災　宮古市の記録　第 1 巻，662pp.

国土交通省東北地方整備局，2014 更新，津波被害・石碑情報アーカイブ(津波石碑一覧シート)，http://www.thr.mlit.go.jp/road/sekihijyouhou/archive/top.pdf，最終閲覧　2016 年 2 月

宇佐美龍夫，2011，最新版日本被害地震総覧[416]-2001　第 3 刷，東京大学出版会，605pp.

卯花政孝，1991，三陸沿岸の津波石碑　ーその 1・釜石地区ー，東北大学工学部　津波工学研究報告　第 8 号，171-230.

卯花政孝，1992，三陸沿岸の津波石碑　ーその 2・三陸地区　その 3・大船渡地区　その 4・陸前高田地区ー，東北大学工学部　津波工学研究報告　第 9 号，233-348.

山下文男，2003，三陸海岸・田老町における「津波防災の町宣言」と大防潮堤の略史，歴史地震　第 19 号，165-171.